

# Appreciation 概念でつくる国語の授業

立教小学校 安達 真理子

## 1 問題の所在

2017年3月、新学習指導要領が告示され、新たに示された「資質・能力」について、授業者ひとりひとりが自分なりの理解をし、授業づくりの方針を定めることが必要とされている。本改訂のためにまとめられた「中央教育審議会教育課程企画特別部会における論点整理」(2015:10-11)によると、育成を目指す「資質・能力」は、i)「何を知っているか、何ができるか(個別の知識・技能)」 ii)「知っていること・できることをどう使うか(思考力・判断力・表現力等)」 iii)「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか(学びに向かう力・人間性等)」の三つの柱で構成されている。

これらの「資質・能力」をバランスよく育成することが肝要であるが、この中で、筆者が最も注目しているものは、iii)「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか(学びに向かう力・人間性等)」である。なぜなら、これまで強調されてこなかった情意面に深く関わり、社会づくりに向けた態度や、優しさや思いやりという人間性の根源に触れる部分を「資質・能力」として位置付けているからである。以下、論点整理に記された「学びに向かう力・人間性等」についての説明を引用する。

iii)「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか(学びに向かう力・人間性等)」

上記のi)及びii)の資質・能力を、どのような方向性で働かせていくかを決定付ける重要な要素であり、以下のような情意や態度等に関わるものが含まれる。

- ・主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する能力、自らの思考のプロセス等を客観的に捉える力など、いわゆる「メタ認知」に関するもの。
- ・多様性を尊重する態度と互いのよさを生かして協働する力、持続可能な社会づくりに向けた態度、リーダーシップやチームワーク、感性、優しさや思いやりなど、人間性等に関するもの。

「メタ認知」、リーダーシップやチームワーク、感性、優しさや思いやりなど、人間性に関わるキーワードが並ぶが、一体、「学びに向かう力・人間性等」とは、どのような「資質・能力」なのか、また、どのような方法でそれらを育成したらよいのだろうか。

その問いに答える方法として、**appreciation**を基盤とした国語授業を提案したい。これは、子どもたちに「主体的・対話的で深い学び」を促す対話・交流であり、授業において、「学びに向かう力」を高め、「人間性」を豊かに育成する可能性を持つ実践であると考えているからである。

## 2 appreciation (アプリーシエーション) 概念と国語授業

**appreciation** とは、「好意的な評価」という意味のある英語だが、それ以外に、「鑑賞」「味

わい」「共感」「感謝」などの意味も持つ。つまり、モノに対しても、ヒトに対しても、相手のよさを認めて好意的な関わりを行う言語である。

アプリシエーションについて、佐伯（2004：216）は、以下のように述べている。

シラケから脱出するには、ものごとをじっくり鑑賞する（*appreciate* する）ことを広げることである。ものごとのおもしろさ、不可思議さ、大切さ、そして「ありがたさ」をじっくり味わうことである。（英語の *appreciation* には「感謝」の意味も含まれる）「沈黙の春」の著者、アメリカのレイチェル・カーソンがいう「センス・オブ・ワンダー」もアプリシエーション（鑑賞）の一つである。世界の不可思議さ、見事さ、美しさなどに「驚愕する」感覚である。

アプリシエーションは、まぎれもなく、文化的実践である。どんな芸術作品でも、それを「鑑賞する人」がいなければ、全く何の価値も意味もないものとされ、いつのまにか葬り去られてしまう。つまり、アプリシエーションは文化を創出し、継承し、発展させるために必要な人びとの営みなのである。

佐伯の「ものごとのおもしろさ、不可思議さ、たいせつさ、そして「ありがたさ」をじっくり味わうこと」を国語授業に援用すると、「教材の持つおもしろさ、不可思議さ、たいせつさ、そして「ありがたさ」をじっくり味わうこと」となり、これを授業において実現するならば、「文化を創出し、継承し、発展させる」営みとなり得ると言うことができるだろう。

筆者は、このような考え方によってなされる対話・交流こそ、学習の基礎段階である小学校教育において大事にされるべきだと考える。なぜなら、そのような *appreciation* 概念を軸とした国語授業では、教材をじっくり味わい鑑賞することによって生まれる個々の解釈を基にして、多様性を尊重する態度と互いのよさを生かして協働する態度という「資質・能力」が育成できるからである。そして、授業を通してリーダーシップやチームワークの大切さを体感することができ、自己肯定感や社会的スキルが養われるからである。それは、一生を支える「学びに向かう力・人間性等」の涵養につながると確信するのである。

以下、国語科授業の一単元で実践する *appreciation* の位相を、具体的に示す。

### 3 *appreciation*（アプリシエーション）の国語単元づくり

*Appreciation* を基盤とする授業は、第1次から第3次までの3段階において、3つの位相を位置付けることができる。

#### 【*appreciation*の3段階】

- ① 第1次：教材への*appreciation*
  - ・初発の感想に現れる個々の教材評価
  - ・授業の中で共に考えたいこと・話したいこと（「問い」・学習課題）の抽出
- ② 第2次：友達の考えへの*appreciation*
  - ・教材の特性を生かした「問い」や、子どもたちから発せられた「問い」に基づく話し合いにおける、友達の考えのよさの相互評価
- ③ 第3次：友達の表現物への*appreciation*
  - ・読解を生かして作成した表現物の相互評価

- ① **教材への appreciation** は、主に第1時で教材との出会いの際に行うひとりひとりの評価である。まず、初発の感想を、自由記述ではなく、「このお話は□だな。なぜかというところ...」でまとめる。すると、初めて出会った教材の第一印象を端的に表し、その根拠となる教材の論理を抽出し理由付けすることになる。つまり、ここでは、教材としてのよさを丸ごと評価することによって、様々な解釈や感想が出現し、読みの幅を広げる上で役立つ。同時に、「友達と考えたいこと・話し合いたいことは～。なぜかというところ...」という形式で、まとめる。すると、解決すべき素朴な疑問を掘り起こしたり、教材の特性に基づいた「問い」が生まれたりするのである。これを単元の導入段階で行うことによって、読みの構えを形成する作用と、主体性を喚起させる作用がはたらく。第1次での教材への appreciation は、子どもたちの教材の本質を見抜く力を磨き、教材のよさ（価値）を生かすという思考ベクトルを築くことである。
- ② **友達の考えへの appreciation** は、第2次の読み深める授業において、対話・交流の柱をなす。第2次では、教師の事前教材研究によって編み出された「問い」と、第一次で抽出された子どもの側からの「問い」を統合させて、学習課題を設定し、話し合い・意見交流の授業を展開する。その際、意見交流は、友達の意見によって自分の考えがどう影響され、どう思考の幅が広がるかが重要である。授業の振り返りで「今日の授業で、誰の発言がよかった？それはなぜ？」と問い、子どもたちは、互いの発言を評価してノートにまとめる。この appreciation を積み重ねていくと、叙述を根拠に理由付けして述べる発言、読み深めに効果的な考え、議論の転換に役立つ意見などを吟味することができるようになっていく。そして、学級全体の思考が磨かれ、より一層、教材の核心に迫る深い読みが実現していく。
- ③ **友達の表現物への appreciation** は、第2次の授業で学んだことを活用した表現活動（第3次）によって産出される表現物への相互評価である。友達が作成した作品への評価は、活動過程の振り返りや自分の表現物との比較というメタ思考が入るため、評価観点が明確で具体的になる。また、共に作り上げた体験の実感から、「友達の学びから学ぶ」という協働的な姿勢も生まれ、主体的且つ鑑賞的な見方で、温かな賞賛の言葉を使って語れるようになる。これらの好意的評価の言葉は、最後に手紙としてまとめて、表現者に直接贈る。このような appreciation の積み重ねで、徐々に思いやりと優しさに満ちた友情が深まり、学級集団としての穏やかな人間関係が築かれていく。ここに、人としての豊かな関わり、「学びに向かう力・人間性等」の涵養が生まれるであろう。

#### 4 実践の概要

筆者が担任する学級では、文学教材・説明的文章教材の如何を問わず、「読むこと」単元では、前述のような学習過程を形成する。勤務校では東京書籍教科書を使用しており、3年生では、4月「すいせんのラッパ」（文学）・5月「自然のかくし絵」（説明文）・6月「ゆうすげ村の小さな旅館」（文学）・10月「サーカスのライオン」（文学）を経て、徐々に鑑賞的な学習課題による話し合いと好意的評価の機会を増やし、Appreciation の要素を強めていった。

ここに例示する「もうどう犬の訓練」（説明文）単元の実践事例は、そのようなプロセスを通して、友達の発言や表現物への関心が高まり、互いのよさを発見しようとする姿勢が熟成しつつある段階のものである。

教材名：「もうどう犬の訓練」（東京書籍 3 年下巻）

単元名：「要約の仕方を学び、活用して、働く犬リーフレットを作ろう」

指導者：筆者

実施学級：筆者の勤務校 3 年 C 組 男子 40 名

実施期間：2017 年 11 月 15 日～11 月 29 日

単元時数：11 時間

次	時	主な発問（学習課題）
1 教材 への 評価	1	盲導犬って何？ 「このお話は～だな。なぜかというと …」で、感想をまとめよう。 みんなで一緒に話し合いたいこと・考えたいことは？
	2	この説明文全体の問いは何？それはなぜ？（根拠と理由） →誰の意見がよかった？
	3	盲導犬の訓練の大変さを想像しよう。 大変さが書かれているのは、どこ？ →誰の意見がよかった？
2 友達 の 考え への 相互 評価	4	説明文を「始め」「中」「終わり」に分けよう。① （話題提示・具体例・まとめ） →友達の考えをどう思った？
	5	説明文を「始め」「中」「終わり」に分けよう。② （問いの文を手掛かりにして） →友達の考えをどう思った？
	6	要約の仕方を学び、要約文を書こう① 要約って何？要約の方法は？ →誰の要約の仕方がよかった？
	7	要約の仕方を学び、要約文を書こう② 上手な要約文はどんな文かな？ →友達の要約文のよさを探そう
3 表現 物 への 相互 評価	8	筆者の述べ方（構成）のよさを活用し、働く犬について調べたことを要約して、働く犬リーフレットを作ろう。
	9	（働く犬を紹介するリーフレット作成）
	10	リーフレット品評会を開こう。 （リーフレットを読み合おう） →相互評価（観点は「構成の的確さ」「表現の工夫」など） いいと思ったリーフレットに、感想の手紙を贈ろう。

第 1 次では、述べられている内容（盲導犬の訓練）への印象をまとめ、教材評価という appreciate を行う。ここでの「教材のよさを評価する」という思考ベクトルを、第 2・3 次で「友達のよさを評価する」思考へとつなぐ。第 2 次では、説明文の構成に着目して三部に分けた後、要約の仕方を学習しながら段落毎に要約文を作成する。その過程で、誰の要約文が的確かを相互に appreciate し、友達の要約文からよりよいまとめ方を学ぶ。第 3 次では、作

成するリーフレットを、構成の的確さ・表現の工夫などに着目して、互いに appreciate (鑑賞・評価) する。

## 5 実践の結果分析

### 5. 1 教材への appreciation (第1次/第1時)

★「もうどう犬の訓練」は、□だな。なぜかというと ... (初発の感想に現れた教材評価の分析) 以下は、□に書かれた言葉。( ) 内は複数回答の数。( ) がないものは一人の回答。

- ① 盲導犬の訓練に対する印象や感想
  - ・きびしいお話 (5) ・大へん (4) ・すごい (3) ・きのどく ・かわいそう
  - ・むずかしそう ・じっとしている
- ② 盲導犬に対する敬意
  - ・犬ががんばっている話 (4) ・犬がかしい話 (2) ・犬がえらい話 (2)
  - ・すごい犬がいっぱい ・人を助ける ・がまんづよい犬
- ③ 説明文の印象や感想
  - ・すごい話 (6) ・大事な話 (目の不自由な人の大事な話) ・まあまあおもしろい
- ④ 説明文が伝える役割や評価
  - ・犬のせいちょうの話 ・せつめい文 ・「自然のかくし絵」のせつめい文みたい
  - ・くわしいことが書かれている話
  - ・犬ががんばっているということを伝えたい話
  - ・犬は頭がいいことがわかる話
  - ・きびしい訓練を教えている話

毎単元同じ形式で初発の感想をまとめているため、回数を重ねるうちに、説明内容からの印象(①②)だけでなく、説明文としての感想や役割・評価(③④)が書けるようになっていく。前単元の説明文と比較したり、次単元への読みの構えを形成したりすることにもつながる。子どもたちにとっては、教材との出合いの段階で、「くわしいことが書かれている」など、説明文としての価値を発見し、この教材が伝えたいことを掴んだ上で読み深めることになるので、重要な appreciate だと言える。また、教師は、第2次に入る前に、子どもたちがどのような印象で教材をとらえているか、どう評価しているかを知ることができ、この情報は、学習課題の設定や交流時の問い返し場面等でも役立つ。第一次感想を「まあまあおもしろい」と書いた児童が、読み深める過程でどう変わっていくか関心を寄せながら展開することも、重要であった。

★★このお話について、クラスみんなでいっしょに考えたい(話し合いたい)ことは～。

なぜかというと ... (子どもから生まれた学習課題の抜粋)

- 1) もうどう犬のひみつがあるか、さがしたいです。もうどう犬にひみつがありそうだからです。
- 2) もうどう犬を見たことがあるか、聞きたいです。どういのかを知りたいからです。
- 3) どういう意味で、もうどう犬がいるのか話したいです。とっても気になるからです。
- 4) ハーネスはどういうように使えるのか、知りたいです。初めて聞いた言葉だったからです。
- 5) もうどう犬が、本当に人間といっしょにいられるかです。電車の線路に落ちたというニュースを見たことがあるからです。

- 6) 犬が、この訓練に本当にたえられるのかです。いかにもたえられそうではないからです。
- 7) もうどう犬の訓練は、どれくらいきついかです。ちょっとそのつらさを感じてみたいからです。
- 8) もうどう犬のくわしい訓練についてです。どういう訓練をして、こういうことができるのかを知りたいからです。
- 9) もうどう犬に、自由な時間があるかです。そんなことは書いてないから、考えたいです。
- 10) もうどう犬は、どんなくらしをしているのかです。もうどう犬なら、ふつうの犬のようなくらしはしていないと思うからです。
- 11) 他にどんなことをするのかです。これには、一部しかのってなさそうだからです。
- 12) ほかにどんな犬がいるかです。ほかにどんなやくわりをもつ犬がいるか知りたいからです。
- 13) ほかに、どんな犬がいるのかです。犬は、いろいろなことではたらいっているからです。
- 14) もうどう犬と、ほかのはたらく犬についてです。もうどう犬以外にも、はたらく犬もいると書いてあるからです。
- 15) もうどう犬は、どれくらい役立っているかということを調べたいです。役立っていたら、それがとても効果的だと分かるからです。

説明内容から想像を広げて、書かれていない事実に関心を持つ傾向が見られる。2) ,4) ,7) のように、実感を伴った理解を望んでいる児童が多かったので、第 3 時で、盲導犬の大変さ（実態）を想像することを課題として語り合った。また、働く犬全体への興味が見られたので、第 8～10 時で、働く犬の調べ学習からリーフレット作りという表現活動につないだ。この説明文には、盲導犬が育成される訓練過程について、読者に事実や実態の想像を促す順序性があり、働く犬全般の話題から絞り込む形で問題を提示する序論部の仕掛けがあるため、子どもたちの関心は、教材の特性を見抜いたものと言える。このように、初読時に生まれる「問い」や関心には、教材が持つ特性に依拠するもの、教材価値を *appreciate* するものがあり、第 2・3 次の学習課題として活用することに意義がある。

## 5. 2 友達を考えへの appreciation (第 2 次／第 6・7 時)

### 要約の仕方を学び、要約文を書こう①②

第 6・7 時では、要約の仕方を学び、学習過程において友達が書いた要約文のよさを発見し、自分の要約文に取り入れるという *appreciation* を行う。要約は、3 年生で初めて扱う事項であり、そもそもどのような言語能力を指し、どのような方法で行えばいいのかを学ぶ必要がある。文脈に沿ったキーワードの抽出と、語末・文末の書き換えや接続という手順を示した後、説明文の具体（第 8 段落を使用）から、全員でその活動を実行する。第 8 段落を選んだ理由は、「盲導犬のがまん強さ」を説明する段落であり、子どもたちにとって最も印象強かった「盲導犬のすごさ・大変さ」の象徴的な内容であるからである。この段落を要約することによって、事実や実態を想像する思考が促され、重要な語や文への意識が高まり、説明内容の理解も深まると考えたからである。児童が作った要約文から、よりよいものを互いに探し出し、なぜその要約文がよいと思うのかを意見交流して、よさを評価し、要約のスキルを学び合う。

#### 【第 6 時】要約の仕方を学ぼう

##### 【1】「要約」とは何かを学習する。

○要約って何？

文章・話などの大切なところを短くまとめること。また、まとめたもの。

(国語辞典で調べて共有する。)

## ○要約の方法

- ① 大事な言葉・文を見つける。 →キーワードを、2 つか 3 つをさがす。  
 ② わかりやすく、つなげる。  
 ・言葉の書きかえ ・言葉のおぎない →キーワードをつないで、短くまとめる

## 〔2〕第 8 段落の文章で、実際に要約してみる。(児童のノートより)

自分がえらんだキーワード

「がまん強く」 「待つ」

自分の要約文

「もうどう犬は、がまん強くじっと待つことがひつよう。」

↓

(意見交流)

友達がえらんだキーワード

「じこ」 「不自由」 「駅」 「動く」  
 「電車」 「勝手」

## 〔3〕誰の要約の仕方がよかったか、評価する。(児童のノートより)

I C 君と K O 君が良かったです。

(理由) 「がまん強く待つ。」に「だから」という言葉もつけているから。

I C 君と K O 君の要約文

「もうどう犬が勝手に動くと、じこになる。だから、がまん強く待つ。」

\*このノートを書いた児童は、自分は「がまん強く」「待つ」だけを選び、初めはかなり短めの要約文を書いた。だが、I C 君と K O 君は、なぜがまん強く待つのかを説明する理由を「だから」という接続詞でつないで書いていたので、I C 君と K O 君の要約文を上手だと評価し、自分も真似てみたいと考えたのである。

## 【第 7 時】上手な要約文はどんな文かな？

## 〔1〕自分の要約文を読み、友達の要約文を聞く。

学級で自分の要約文を聞いてもらいたい人(約 30 名)が、次々に読んでいく。全員で、どんなキーワードを使っているか、どんなつなぎ方をしているかを注意深く聞き合い、それぞれの要約文のよさを見つけていく。

## 〔2〕誰の要約文がよかったか、推薦し合う。

推薦された要約文は、以下の 3 つ。(児童のノートより)

- O I C 君と K O 君 「もうどう犬が勝手に動くと、じこになる。だから、がまん強く待つ。」  
 O H A 君 「もうどう犬が勝手に動くと、じこが起きてしまうので、がまん強く待たなくてはならない。」  
 O K A 君 「もうどう犬は、目の不自由な人がじこにあわないよう、勝手に動くのをがまんする。」

## 〔3〕3 つの要約文のよさを分析する。(意見交流)

T : みんながいいなと思ったのは、この 3 つの要約文でしたね。では、この 3 つのよさを

説明してくれますか？

C：3 つとも、なぜ盲導犬ががまん強く待たなければならないか、ちゃんと理由が書いてある。

C：I CとK O君は、「だから」でつないでいるのがすごい。ぼくは、そんなことを思いつかなかったから。

C：H A君はそれと同じ言い方だけれど、一つの文でまとめている。一つの文はすっきりしていて、いい。

C：K A君の要約文には、「目の不自由な人」というキーワードが入っていて、誰が事故にあうと困るかが分かるから、とてもわかりやすい。

\*第 6 時で評価されていた I C 君と K O 君は、約 30 名分の要約文が出揃った中でも、注目されていた。選ばれたベスト 3 の要約文のよさを詳しく分析する中で、当の I C 君と K O 君、H A 君、K A 君が自信を得られたのは当然のこと、全員で上手な要約の仕方を習得した。

### 5. 3 友達の表現物への appreciation (第 3 次／第 11 時)

第 2 次で習得した要約の方法を活用して、参考図書や資料で調べた「働く犬」に関する情報を要約し、リーフレットにして紹介する学習に展開する。第 1 次で「働く犬」全般への関心が広がり、第 2 次で盲導犬の訓練の実態を想像し読み深めたことから、更に調べて表現したいという意欲が高まっていた。「働く犬」調べ学習で得た情報は多岐にわたるので、習得した段落ごとの要約にとどまらず、段落構成とそれを生かしたリーフレットの折り方(2 つ折り・3 つ折り・観音開き等)の選択等、全体の伝え方を意識した作品が産出された。品評会では、「構成の的確さ」「表現の工夫」を主な観点として、appreciation が行われた。

【第 11 時】リーフレット品評会を開こう

〔1〕品評会とは何かを、国語辞典で調べて学ぶ。

○品評会って何？

品物や作品などについて話し合い、そのよさを決めること。

〔2〕リーフレット品評会を開き、手紙を書く。

○リーフレット品評会の進め方

(＊ノートを持参し、メモを取りながら読む。)

- ① 4 人一組の班(全部で 10 班)で、自分以外の 3 人のリーフレットを読む。
- ② リーフレットを班の机に置いたまま、次の班のリーフレットを読みに行く。
- ③ 全部で 10 班分(40 名全員分)読めるように次々と移動し、どのリーフレットがよかったか数人を選ぶ。
- ④ 「□君のリーフレットが良かったです。(理由 12 行)」手紙を書く。

以下、手紙例。原文のまま。(手紙総数 178 通)

手紙(1) I I 君→K A S 君

K A S 君のリーフレットが良かったです。なぜかというと、1～5に分かれていて、改行して、とても読みやすかったから選びました。

それに、表紙の警察犬の絵も上手でした。ぼくは、絵を見て、犯人をさがすために臭いをかいてるように見えました。ぼくは、あんなに上手なリーフレットがどうやってできるのかなと思いました。

文章もとても読みやすいきれいな字で、とてもよいリーフレットだったと思います。



手紙（２）NA君→SE君

SE君のリーフレットが良かったです。SE君は、かんのんびらきで、合わせると文字が読めるので、他ではなかったのすごい発そうだなあと思いました。

そして、中の図がとても分かりやすくて良かったです。そして、けいさつ犬の絵は大きくて、どのようなものかわかりやすかったです。そして、始め、中、終わりがわかりやすくて、とても良かったです。新聞のようにわかりやすくしていて、とても良かったです。さらに、字も大きく読みやすかったので、すごいリーフレットだなあと思いました。

手紙（３）NA君→MA君

MA君のリーフレットが良かったです。あまり知られていないばくはつ物そうさ犬のことをとてもくわしく説明していて、とてもすごいと思いました。そして、「訓練のないよう」「見つけたら」、しゅるい分けがとてもよくできていて、良かったです。ばくはつ物そうさ犬といっても、しゅるいがちがうというのを知って、とてもびっくりしました。

いろいろと知らないことをたくさん教えてくれて、すごいリーフレットだと思いました。これは、（ふつうの\*筆者補足）リーフレットよりもくわしく思ったので、説明文のようにも思いました。

手紙（４）KAS君→AO君

AO君のリーフレットが良かったです。表紙のまわりの色や絵がかわいいから、読みたくなります。犬の足あとを描いていた工夫も良いと思いました。あと、中の絵がとても上手でした。指の線まで描いていたので、すごいなあと思いました。セラピードッグの事をちゃんと要約していたので、読みやすいです。字も大きかったので、より読みやすかったです。かぎかっこも使っていたので、題名みたいで良いなと思いました。

手紙（５）MU君→SHI君

SHI君のリーフレットが良かったです。けいさつ犬と比べているのが良かったです。ベン図を使っていて、絵もすごく良かったです。仕事を終えた災害救助犬の事を書いてあり、分かりやすくてたくさん書いていて、かんのん開きになっていて、わかりやすかった。絵も大きく書いてあって、何を伝えたいのかが分かりました。

ばくも、ベン図を使ってリーフレットを作りたいです。新しい書き方が分かりました。

観点を拾い上げると、**①～⑤**〔手紙（１）〕や「始め、中、終わり」〔手紙（２）〕のような段落構成、「訓練のないよう（内容）」「見つけたら」〔手紙（３）〕のような内容項目、「観音開き」〔手紙（２）（５）〕のような紙折りに言及し、リーフレットの構成を評価する傾向が強い。また、第２次で学習した要約の仕方に触れ、「ちゃんと要約していた」〔手紙（４）〕とも認めている。「ばくも、ベン図を使ってリーフレットを作りたいです。新しい書き方が分かりました。」〔手紙（５）〕のように、自分には思いつかない発想に感心し、友達から学ぼうとする姿勢も見られた。

## 6 結語—成果と課題

appreciation 交流は、教材の持つ特性や友達のよさを発見し、多様性を尊重する態度と、互いのよさを生かして協働する精神を基盤としている。従って、文部科学省「論点整理」にある「資質・能力」の「多様性を尊重する態度と互いのよさを生かして協働する力、持続可能な社会づくりに向けた態度、リーダーシップやチームワーク、感性、優しさや思いやりな

ど、人間性等に関するもの。」を育成する上で、適した概念だと言えるだろう。本実践に現れたように、友達の素晴らしさから謙虚に学び、自分に取り入れようとする「学び合い」の授業は、人に対する敬意や思いやり、優しさを自然に身に付けさせてくれる。

また、本実践は、教材への appreciation / 友達の考えへの appreciation / 友達の表現物への appreciation の3段階で構成し、それぞれの位相をつないで、首尾一貫させたことにも意義があっただろう。前段階での appreciation の思考ベクトルが、次々と引き継がれていくことにより、「主体的・対話的で深い学び」が、自然に促されていくようであった。このつながりを、偶発的なものとせず、さらに有機的なものと進化させることを、次なる課題としたい。実は、リーフレットの相互評価活動中、全く予想しない出来事が起きた。教師（筆者）は、一人につき2～3枚書くのが限度であろうと、手紙用紙（12行罫のワークシート）を100枚程しか印刷しなかった。3年生は、1枚書くのに約5～10分は必要だと予想したからである。しかし突然、HA君が、「先生。友達全員にお手紙を書きたいので、紙をあと40枚ください。」と言いに来た。訳を尋ねると、「せっかく頑張ってリーフレットを作ったのに、もしお手紙をもらえなかったら、かわいそうでしょう？」と、週末に家で全員分書きたいと言うのである。実際、HA君が週明けに完成させてきた時、クラス全員が心から感謝したのは、言うまでもない。注目すべきは、その内容である。自分以外の39名分、全て違うコメントが書かれていたのである。HA君は、品評会でメモを取る段階から、全員分の一言メモをノートにぎっしり書き込んでいたのだ。この主体性、計画性、学びに向かう力と思いやりの深さに脱帽した。その後、触発された数人が、HA君のリーフレットを読み直してHA君への手紙を増やしてくれた。このように、広がりや深まりを見せる子どもたちの豊かな人間性から、大いに学ばせてもらった。

だが、本実践には、分析方法が未熟であるという課題が残る。筆者にとっては、忘れたい貴重な出来事が目の前に現れていたが、授業理論化するには、ひとつひとつの事実をエビデンス化し、よりの確な分析と考察が必要だろう。今後、更に実践を重ねながら、理論と実践の融合を図り、研究の幅を広げていくために、本実践に対するご批評を仰ぎたい。

## 文献

- 文部科学省（2015）「中央教育審議会教育課程企画特別部会における論点整理」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/sonota/1361117.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/sonota/1361117.htm)  
 （2015年8月26日確認）
- 佐伯胖（2004）『「わかり方」の探究—思索と行動の原点—』小学館 216
- 奈須正裕（2017）『「資質・能力」と学びのメカニズム』東洋館出版社
- 奈須正裕（2017）『教科の本質を見据えたコンピテンシー・ベースの授業づくりガイドブック—資質・能力を育成する15の実践プラン—』明治図書
- 新教育評価研究会（2017）『新学習指導要領における資質・能力と思考力・判断力・表現力』文溪堂